

短期大学における幼児・児童向け英語教育の実践： 教材研究と学生の学びについて

小 玉 容 子¹ キッド ダスティン²
(¹総合文化学科 ²本学非常勤講師)

English Workshop for Pre-School and Elementary School Children:
Teaching Materials and What College Students learn through the Workshop

Yoko KODAMA, Dustin KIDD

キーワード：Kids' English, Teaching Materials, English Workshop, Student Teachers

1. はじめに

島根県立大学短期大学部では、その前身である島根県立島根女子短期大学文学科英文専攻で、平成14年度に幼児・児童向け英語教育の教材研究と実践をスタートさせた。これは、平成10年に改訂された学習指導要領により、平成14年度から「総合的な学習の時間」が設けられ、また、平成15年3月には『英語が使える日本人』の育成のための行動計画が文部科学省より出されるなど、早期英語教育に向けての動きが活発になった時期でもある。平成21年度には小学校第5・第6学年の児童に「英語ノート」が配布され、多くの小学校が前倒して「外国語活動」を始めた。そして平成23年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化された。「外国語活動」においては、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活

動を行うことになっている¹⁾。

このような経緯を経て現在に至っている小学校英語教育だが、本学では学生の子供向けの英語教育に関する関心および需要の高まりを受け、平成14年度にゼミ活動として「幼児・児童を対象とした英語教育」研究およびプロジェクトをスタートさせた次第である²⁾。そして、平成19年の公立法人化を機に、「キッズイングリッシュ&ストーリーテリング」(以下「キッズ」と表記する。また科目名は平成23年度から「キッズ・イングリッシュ」に変更されている。)をカリキュラムに導入した。この授業の目的は、幼児・児童対象の英語教育に関する教材研究や指導法の習得だが、受講生の英語力および様々なレベルでのコミュニケーション能力を向上させることも目的の一つである。

本稿では、これまでの「キッズ」の授業や実践で用いた教材を整理し、「キッズ」受講生がそれらの教材を用いて実践のための練習および実践をすることで、何をどのように学んだかについて明らかにしていく。そして、学生の「学び」に有効だけでなく、

今後の「キッズ」の授業で利用でき、かつ広く小学校でも活用できる教材を検討、提示していく。また、「キッズ」の実践を通して、英語力やプレゼンテーション力伸ばすだけでなく、広くコミュニケーション能力という点で学生がどのように成長したかなど、この実践授業の持つ意味も合わせて考えていきたい。

2. 「キッズ」のプログラムと教材の活用

平成14年度以降継続して実施している活動内容は：

- 1) 歌（体の動作、ダンスなどを伴う歌、動物の鳴き声などが入った歌、手遊び歌）
- 2) 紙芝居、絵本の読み聞かせ
- 3) 英語を使ったゲーム

である。授業では、教材研究として、紙芝居の制作をしたり、学生の耳を鍛え自然な発音へとつなげるために、ストーリーのディクテーションを行ったり、口をしっかりと動かす訓練のために、Tongue Twistersなども取り入れている。以下、1)と2)について、これまで用いた教材を例に、その利用目的や練習および実践での学生の気づきなどを含め、どのようなことを学生が学んでいったかを整理していく。

- 1) 歌（体の動作、ダンスなどを伴う歌、動物の鳴き声などが入った歌、手遊び歌）

様々な歌を授業で紹介し、練習するが、学生が実践時の教材として利用する頻度の高い歌は以下の歌である。すべて英語教材としては馴染みの深い歌である。(1) 体を動かしながら歌う歌では 'Head, Shoulders, Knees and Toes'、'Hokey Pokey'、'Mulberry Bush'、'If You're Happy' など、(2) 動物の鳴き声などが入った歌では 'Old MacDonald Had a Farm'、(3) 手遊び歌では 'Itsy Bitsy Spider' や 'Rock, Paper, Scissors' などである。学生は自分たちが使いやすい、または覚えやすい教材を選択する傾向があるので、実践で利用しない歌もすべて覚えることを必須としている。以下、それぞれ実践教材としての利点と学生が特に注意して習得を目指す

点を挙げていく。

(1) 'Head, Shoulders, Knees and Toes' は、題名中の語以外にも、'eyes'、'ears'、'mouth'、'nose' など、児童・幼児英語教育では早い段階で扱う、体の部位を表す単語が多く入っている。日本語でも馴染みのある歌なので実践では頻繁に使っている。体を動かしながら歌え、慣れてきたら歌うスピードを上げたりするなどの楽しみ方もできる歌である。練習中、特に注意するのは個々の発音で、'Head' の 'd' はカタカナ英語で使われる「ヘッド」の音をそのまま発音してしまう学生がかなりいるので、注意が必要な音である。**[d]**は、上の前歯の裏の歯茎にしっかりとつけた舌を勢いよく弾き、息を開放することで発音される。息を鋭く押し出す力が大事なので、勢いよく鋭い子音を飛ばすよう意識する。日本人は単語の最後の音まではっきり発音しない傾向があるので、'd' が語の最後に来る場合は、特に気をつけて練習する必要がある³⁾。

次は 'shoulders' と 'toes' の 'ou'、'oe' と 's' である。これらの単語も、カタカナ英語で「ショールダー」「トー」と発音される語なので注意が必要である。二音がセットで一つの音として扱われる二重母音(diphthong)には、[ai](eye)、[au](out, mouth)、[ɔɪ](boy)、[ei](say, face)、[ou](shoulders, toes)などがあるが、最後に挙げたカタカナ英語で「オー」と発音される[ou]は特に注意が必要である。また、複数形の 's' は、『外国語学習の科学』で白井氏が指摘しているように⁴⁾、三人称単数現在の 's' よりもさらに習得が難しい。知識として知っていても実際の会話などで使うことが難しい事項の一つである。この複数形の 's' に注意してしっかりと発音することは、幼児・児童の英語学習の面でも大切だが、学生の意識的な繰り返し練習は、他の場面で実際に英語を話す場合にも有効であろう。

その他にも注意すべき音は多々あるが、この歌では他に 'mouth' の 'th' **[θ]** も学生が繰り返し練習を要する音である。**[θ]**は、**[ð]**同様に、日本人英語学習者にとって共通の難しい音である。外来語として定着している語には、サ行の音が充てられることが多い。'thank you' は「サンキュー」はその一例

である。先にも指摘したようにカタカナ英語になっている語ほど、学生が実践の場で正しく発音することが難しい。【θ】は発声上は【t】の音に似ているので、【t】の発音を意識しながらの発音が助けになる。以上のように、日本語の中で使われている音を修正していくためには、繰り返し注意し、繰り返し練習し、慣れることだけが習得の道である。

‘Hokey Pokey’ は、‘right’、‘left’、‘foot’、‘hand’などの語、動きでは‘put out’、‘put in’、‘shake’などのように、実際に生活の中で使われる頻度が高い語や動きが入った歌である。他に、‘shake it all about’ ‘turn yourself around’ ‘That’s what it’s all about.’ などがあるが、これら副詞を伴う表現は学生が実際に英語を話す場面で使うことが不得手な表現でもある。

‘Mulberry Bush’ では、‘This is the way we wash our face (brush our teeth, comb our hair)’のように、毎朝実際に行う行動を表す表現が繰り返される。この日常生活の動作に関しては、子供たちが毎朝触れられる表現であるという点で大切であるとともに、学生にとっても‘This is the way we (do something)’というセンテンスレベルでの表現を習得することで、使用可能な英語表現を増やすという意味でも大切である。また、‘If You’re Happy’ は、学生にとって、歌詞を覚えることに加えて、メロディに言葉をのせるために口をしっかりと動かす練習にもなる歌である。

(2) ‘Old MacDonald Had a Farm’ では、動物の鳴き声を表す音が、英語と日本語では違うということを知り、子供たちは学ぶ。このように歌を通して自然に子供たちは異文化に触れることができる。また、英語で動物がどのように鳴くかを学ぶ機会がなかった学生が多いので、学生にとっても貴重な文化教材である。そして、子供たちと一緒に動物の鳴き声を言うことで、学生も楽しみながら大きな声を出す練習にもなる教材である。

(3) ‘Itsy Bitsy Spider’ と ‘Rock, Paper, Scissors’ は指遊びや手遊びをしながら、何度も繰り返し歌い、楽しむことができる教材である。後者は特に日本語の歌も保育園などで頻繁に歌われ、幼児も参加

しやすい。

このように英語の歌は、楽しく英語への興味・関心を子供達に持ってもらうためには一番の教材である。また、学生が発音を基礎から繰り返し習得できるだけでなく、楽しく踊り、大きな声で歌うという「キッズ」の実践の基礎を習得できる教材でもある。言うまでもなく、発音練習は歌だけでなく、すべての教材を提示する際に共通する重要な練習である。ここで挙げた発音練習の例は、文章を読む時も注意しながら、正しい発音、クリアな発音の習得を目指して繰り返し練習する音でもある。

2) 「紙芝居」や「絵本」の読み聞かせ

読み聞かせでは、単語レベルはもちろんのこと、様々なレベルでの読みの技術の向上が求められる。学生にとって文章は簡単でも、読みの練習の繰り返しを要求される活動となる。アメリカのセントラル・ワシントン大学元教授スーザン・ドナホー氏（国語教育）から提案された Oral Reading Style のスキルチェックリストを参考に、学生が習得すべき点を整理し、以下のように学生に事前説明をしている⁵⁾。

- 個々の音を明瞭に発音すること (Careful articulation)。アクセントを置く位置をはっきりとさせ、口をしっかりと大きく動かす (Large mouth movements)。
- 発音に関しては、語を音節ごとに区切り (syllabication)、強弱のアクセントをはっきりとさせる。
- 状況に合わせて、表現方法を変える。例えば音量、口調、ペース、言葉遣い、そして言い直しなど。そして、大きさに！劇的に！（Be dramatic!）
- 単調にならないように、同じペースを避ける。意味のかたまりで区切る。意味のかたまりを表す間を置く。基本的に、句点では1拍、読点では2拍、段落が変わる時は3拍の間を置く。
- 人物によって声を変えるなど、演劇的な読みを心掛ける。顔の表情、ジェスチャー、アイコンタクト、接近したり、動いたりなど、様々な工

夫をする。

アメリカでも小学校国語教員は読み聞かせのために一定のスキルが求められる。上記の各項目を学生がどのように習得しようと練習を積み重ねたか、扱った教材を紹介するとともに、学生の実践について整理していく。

(1) 紙芝居は、“Little Red Riding Hood”、“Mouse’s Wedding”、“Three Little Pigs”、(2) 絵本は Eric Carle の *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*、*From Head to Toe*、大型絵本の *The Giant Turnip*、仕掛け絵本の「犬のスポットシリーズ」*Where’s Spot?*、*Who’s There, Spot?*、Dr. Seuss の本の中では *The Eye Book*、ハロウィーンの季節に向けての *What’s in the Witch’s Kitchen?*、*Go Away, Big Green Monster!*⁶⁾ 等である。読み聞かせの場合は発音や読み方だけでなく、声の大きさ、ページをめくるタイミング、間をどこでどのように置くか、多くの場合は複数の読み手があるので、本を持ちページをめくる人と読み手の居る位置などにも工夫や注意が必要である。実践後の学生のレポートを読むと、学生がどのように上記の点に注意を払ったかが分かる。以下、実践の練習と、平成25年度前期の受講生(24名)が実践を通して得た気づきや感想(鍵かっこ内)も加えながら、教材を紹介する。

(1) 紙芝居は平成25年度以前の学生が制作した作品の中から、多くの子供たちが知っているストーリーという基準で三作品を選んだ。“Little Red Riding Hood”と“Three Little Pigs”では狼が登場する。その狼を如何に表現するか、学生は特に注目した。Little Red Riding Hood と、Granma に変装した Wolf のやり取りが繰り返される場面は、絵も誇張して描かれているが、言葉のやり取りも誇張して読むことで、長いストーリーが単調になることを避けることができた。また最後の繰り返し、“Granma, what big teeth you have!” “All the better to eat you with!” で、声音や調子を変え、子供たちの注意を一気に引きつけることができた。「狼のいびきやノックの音など、実際に効果音を用いて」臨場感を出す

こともでき、劇的な演出をすることができる教材である。

“Three Little Pigs”の狼が子ブタの家を次々に壊す場面では、‘puff, huff’、‘blow your house down’などの台詞で、ジェスチャーを交えながら話を進めた。このストーリーは他にも“Please let me in.” “No way!” など、繰り返しが多く、子供たちの耳に残ったと思われる。担当の学生は「子供たちも集中して聞いてくれていた」と感じたようだ。そのほかの場面では、例えば、お湯を沸かした釜に狼が煙突から落ちる場面では“Splash!”を思い切り大きな声と仕草で表現し、「びっくりしたと言っていた子もいたので臨場感が出せたようでよかった」し、また、学生自身も、セリフを覚え「劇仕立てにしたりして、楽しむことができた」とふり返っていた。

“Mouse’s Wedding”でも、“Will you marry our daughter?”と太陽、雲、風、壁などに次々と頼む親ねずみに対して、返事は「役に合わせて声を変えたり、感情を込めたりするのが難しかった」が、学生は頑張って練習した。「紙芝居ではナレーションとキャラクターのセリフの読み分けや、ジェスチャーなどを使って、もう少し子どもたちにとってわかりやすくしなければならなかったと感じた」学生や、「実際に発表してみて、自分が思うよりもゆっくり読まなければならなかったり、発音や抑揚などに気を付けなければならなかった」ことに気づいた学生など、練習や実践を通して学んだことが多かった。

(2) 絵本の *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* では、様々な色の動物が次々に出てくる。動物に合わせて少し声を変えたり、トーンを変えたりと学生は努力したが、動物の声を想像して変えていくのは大変難しかったようだ。*From Head to Toe* では、動物が体の部位を使って様々な動きをする。そして、“Can you do it?”と動物が問いかけ、“Yes, I can do it.”と子供が答える。このやり取りを繰り返すが、子供が同じ動作をしてみせる。その動作を「どうしたら分かりやすく伝えることができるか、試行錯誤を重ね、最終的に大きな動き」をグループで工夫していった。

Where’s Spot? と *Who’s There, Spot?* は、仕掛け絵

本である。仕掛けの下からいろいろな動物が出てくるので、読みと仕掛けのフリップをめくるタイミングをとることに注意を払うように伝えた。文を読むときの「間」はもちろんだが、このような仕掛け本を使用するときも、また「間」が重要になる。学生は「担当者三人の役割配分や、呼吸を合わせることに最後まで悩みました。少しでも合わないと失速したり、逆に早すぎたりしてしまいました。」と、その難しさを体験した。このような仕掛け絵本は子供たちの注意を引きつけるため、学生に勧める教材だが、英語そのものではない難しさが付随する教材でもある。

What's in the Witch's Kitchen? と *Go Away, Big Green Monster!* も仕掛け絵本で、仕掛けとモンスターは、子供たちの興味を大いに引いてくれる。「GO AWAY, BIG GREEN MONSTER! はモンスターの顔が出来上がってくるにつれて子どもたちが反応してくれました。私は後半のモンスターの顔がなくなっていくところを読みましたが、その時は驚きの声や笑い声が聞こえて、自分も読んでいて楽しくなったし、子供たちが喜んでくれて嬉しかったです。」これらの絵本は、ハロウィーン関連のキャラクターや物事に触れることができ、文化学習教材としても有効である。

以上のように、様々な工夫をしながら、繰り返し練習し、暗記をし、プレゼンテーションをするという、紙芝居や絵本の読み聞かせの実践を通して、学生たちは、先に示した Oral Reading Style のスキルを習得することができた。また、大きな声で、元気に明るく子供たちに接するという、コミュニケーションの基本姿勢に関しても大いに学ぶことができた。

3. 今後の「キッズ」授業で利用する教材の検討

キッズの授業では、これまでも手作り教材として、日本昔話（『ネズミのよめいり』、『三年寝たろう』、『ももたろう』、『かさ地蔵』）や、出雲神話（『いなばの白兔』、『ヤマタのオロチ』）の紙芝居を作ったり、ビンゴゲームやサイコロゲームなどを作成したりしてきた。今後も手作り教材制作は継続していく

予定である。ハロウィーン教材をはじめ、絵本などで、西欧の文化に触れることができるが、日本の物語を教材にして海外へ発信する方向を学生に意識させることも大切にしていきたい。

これまで見てきたように、実践の準備過程では、個々の単語の発音からプレゼンテーションのスキルに至るまで、学生は練習を通して幅広く学んでいく。しかし、学生の側の学びだけでなく、「子供たちにとって、私たちが初めての先生になる可能性が大きいので、正しい発音でゆっくり話すことが大切だと、私は思いました」と感想で書いた学生がいるように、子供たちが単にその時間を楽しむだけでなく、学ぶ要素もしっかりと入れていくことが今後特に重要になってくると思われる。小学校での外国語活動が3・4年生に向けても実施される方向で動いている今、本学での「キッズ」も、子供たちが楽しみ、かつ学ぶことができる新たな教材を次年度以降取り入れていきたい。

次に紹介するのは、2の1)の歌で扱った体の部位と発音、単数・複数などに関する教材である。

図1



図2

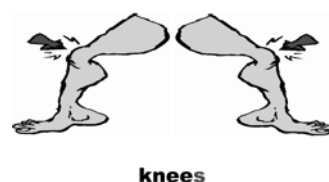


図3



図4⁷⁾



このような教材を用いて文字を取り入れる。また、文字と同時に 'phonics' 教材を使用することで、スペリングと音の関係を知り、新しい語を読む知識を得る方向へと子供たちを導くことができる。その例を以下に紹介する。

図5



図6

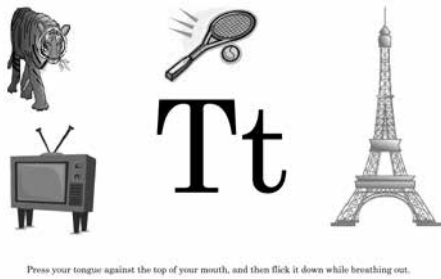


図7

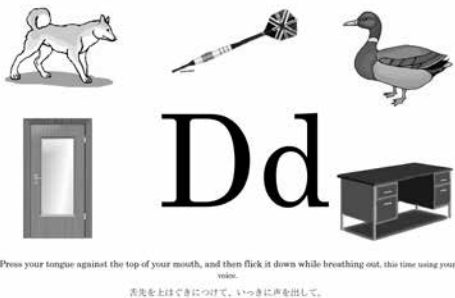
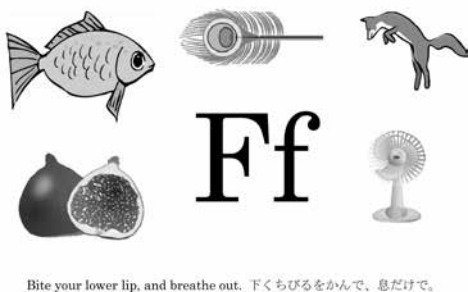


図8⁷⁾



‘Phonics’ は学生にとっても学習する意味が大きい教材となるだろう。‘Phonics’ 教材に対する関心は、小学校での英語活動教材の検討の中で注目を集めてきた。文字と音との関係についての知識は、幼児・児童向け教材の中でも、ますます重要度を増していくことになると思う。その他、紙面では紹介できないが、キッド作成の Phonics CD は、口の動きと共に音声を確認できる教材である。今後は、上

記のような様々な副教材の活用も視野に入れ、学生自身の学びだけでなく、子供たちに対する教育力を高める方向を探っていきたい。

4. 「キッズ」授業をとおしての学生の学びについて

学生は「キッズ」の実践をとおして、様々な気付きを経験し、英語だけでなくコミュニケーションという点でも、多くのことを学んできた。以下に、その学びの内容が分かる学生の感想を紹介する。

「実践のためにまず気を付けた点は、歌を歌う時や本の読む時、スピードを落として、間をしっかりとあけることだった。絵本や紙芝居は、単調に読むのではなく、登場する動物や状況が想像できるように読まなければならないので、この点がすごく難しく感じた。絵本や紙芝居をただ読むことは簡単だが、動物の鳴き声を入れたり、どの登場人物が話しているかをわかりやすくするために、さまざまな工夫をすることで、子供たちが理解しやすくなることも重要だと感じた。」

「練習のときに先生に何度も指導して頂いて頭の中では解っているつもりですが、それに加え発音やイントネーションにも注意を払っているとなかなか思うように上手くいきませんでした。先生の言われた通り何回も練習をしておくことが重要なのだと実感しました。」

「第1回目の発表を終えてみて、小さい子どもたちに英語の歌を教えたり、絵本や紙芝居を読み聞かせたりすることはとても難しく、約20分間の発表でとても疲れて汗をかいてしまいました。」

「きちんと覚えてきた台詞は、自信を持って言えるのでしっかり覚えてこないといけな思いました。練習のときから、意識して強弱をつけ、発音に気をつけないといけな。本番で緊張していつもの自分の癖がでてしまいました。」

「発表してみても得ることはたくさんありました。子どもたちに理解してもらうためには、言葉や台詞をはっきりと感情を込めて言ったり、1つ1つの動作を大きくしたり、また、子どもたちの反応に合わ

せて少し間をあけたり、呼び掛けてみるのが重要だとわかりました。」

「授業での最初の頃の練習では、私は恥ずかしさなどから声が小さかったり台詞を淡々と言ったりしていました。しかし、練習を重ねる度にその恥ずかしさは無くなり、だんだんと声が大きくなっていき、台詞に込める感情も湧いてくるようになるのが自分でもわかりました。」

「Hokey, Pokey のダンスが一番盛り上がったと感じた。‘shake’ の部分を大きさにやったら子供たちがとても喜んでくれた。手遊びは、最後にはほとんどの子ができるようになっていて、帰りに見せにきてくれたりしたのでとてもうれしかったし、やってよかったと感じた。」

「おはなしレストランでの英語読み聞かせは良い経験となった。最初の練習からとても苦労はしたが、子供相手に英語をゆっくり発音することによって、イントネーションの位置、強弱の付け方など、普段の英会話では気づけなかったようなところが勉強できた。」

「子どもたちの反応があると、こちら側も楽しくなって、自然と笑顔がこぼれるくらい楽しかった。」

「私はキッズ・イングリッシュの授業で、はじめは子供たちの前で堂々と発表することができるのかと、とても不安に思っていたが、実際に行ってみると、たくさんの人たちに助けられながらも、グループで協力し、なんとか発表することができた。本番は、初めに子供たちの前に立ったとき、とても緊張したが、発表が始まり自己紹介などをしていると、子供たちが興味を持って聞いてくれていることに気づき、頑張ろうと思えた。」

「終わってから、『遊ぼう』と言ってくれる子や、バイバイのハイタッチをしてくれる子、『ありがとう』と言ってくれる子がいて、短い時間だったけど楽しんでもらえたかなと思います。いくら短い時間でも自分たちが精一杯すれば、仲良くなれるんだなと思ひ、振り返ってみてから楽しかったなと思える経験になりました。」

「地域の子供達と触れ合う良い機会になった。他の授業にはない楽しさがあった。」

「夢が児童英語教師。短大への入学理由も、キッズ・イングリッシュだった。」

このように様々なレベルでの学びを体験できる「キッズ・イングリッシュ」の授業を、幼児・児童英語教育に一層貢献できるものにしていく方向で今後も発展させていきたい。

注

- 1) 「文部科学省小学校外国語活動」サイト参照：http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/、最終アクセス2013年11月15日)
- 2) 2002年度から2004年度までの3年間の取り組みに関しては、「幼児・児童向け英語教育の教材研究と実践：短期大学生とともに」で、ゼミ活動を中心に報告している。
- 3) 発音やイントネーションなどに関しては、W.L.クラークの『アメリカ口語教本・入門編』と、「Eigoriki.net」のサイトを参考にしている。<http://eigoriki.net/cat7/>、最終アクセス2013年11月15日)
- 4) 白井恭弘『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』13-14。
- 5) スーザン・ドナホー氏とは、2009年に児童向け英語教材の活用についての共同研究を行った。詳しくは、小玉容子、スーザン・ドナホー、クリス・ラング、ダスティン・キッド、“Development of Curriculum and Educational Materials for Elementary School English” pp. 22-25参照。
- 6) 絵本教材の活用に関しては、リーパー・すみ子『えほんで楽しむ英語の世界』（一声社、2003）を参考にした。また、実践で採用した絵本に関しては参考文献を参照。
- 7) 教材の作成にあたっては、無料の差し込み画像データ集のサイト‘Hasslefreeclipart’ (<http://www.hasslefreeclipart.com/>、最終アクセス2013年11月29日)と‘openclipart’ (<http://openclipart.org/>、最終アクセス2013年11月29日)の画像を利用した。

参考文献

- クラークW.L. 『アメリカ口語教本・入門編』 研究社、1997.
- 小玉容子. 「幼児・児童向け英語教育の教材研究と実践：短期大学生とともに」 『島根女子短期大学紀要』 第43号 (2005) : 39-49.
- 小玉容子、スーザン・ドナホー、クリス・ラング、ダスティン・キッド. “Development of Curriculum and Educational Materials for Elementary School English.” 『GPフォーラム・プレフォーラムセッション予稿集』、(2009) : 22-25.
- 白井恭弘. 『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』 岩波新書、2008.
- リーパー・すみ子. 『えほんで楽しむ英語の世界』 一声社、2003.
- Carle, Eric. From Head to Toe. New York: HarperCollins, 1999.
- Dr. Seuss as Theo. LeSieg & Roy McKie. The Eye Book. New York: HarperCollins Children's Books, 2008.
- Emberley, Ed. Go Away, Big Green Monster!. New York: Little, Brown and Company, 1993.
- Hill, Eric. Where's Spot?. New York: Putnam Juvenile(Brdbk), 2003.
- Hill, Eric. Who's There, Spot?. New York: Puffin Books, 2005.
- Martin. Bill, Jr. Pictures by Eric Carle. Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?. New York: Puffin Books, 1984.
- Sharratt, Nick. What's in the Witch's Kitchen?. London: Walker Books, 2009.

(受稿 平成25年11月29日, 受理 平成25年12月12日)